

行くと言う。しかたがない。何はともあれ、奉天までの辛抱だ。列車から馬車、馬車から列車、でも日本に帰るんだと、みんな頑張った。

待ちに待った奉天に着いた。

しかし、死亡した人が三人もいる。早速、奉天の火葬場へ。でも火葬場とは名ばかり。こもにまいて名札がつけられた死体が山と積まれている。焼いているのは日本人の子供だ。順番を待っていれば時間がかかる。お金をつかませて早く焼いてもらうのがいちばんだ。帰って来たら、明日、錦州へ出発だの命令。錦州で一週間は、馬小屋で、馬なみの生活だったが、そんなことは問題ではない。

コロ島からの乗船当日は雨であった。無事乗船できた。しかし、船の中で死亡した人、目の前に日本を見ながら息を引きとった人もいる。残念であったろう。引揚げては来たが生活の労苦が待っていた。戦後四十六年過ぎて、当時のことは少しも忘れることはない。

## 私の終戦

愛知県 鶴見 順市

私は関東軍の傘下六八八部隊の系列下で、満州から日本まで食糧品を運ぶ船を二十四時間、三交替制で配船管理をした。軍の暗号電報が八月十二日午後八時に入電、十三日、十四日、十五日と、敗戦処理のため、軍関係の資料を毎日焼き続けた暑い暑い毎日だった。戦用品保管者としての私の印かんの押しであるすべての書類を焼いたつもりでしたが、八路軍の指名手配で、三回囚われ、追求を受け苦しみました。幸い、親しくしていた中国人の代表が数人来てくれて、鶴見は良い奴だ、我々が責任を持つからと、三度とも一日で出してもらいました。

南満州営口市での仕事でしたので、八月十九日の但し書きの無い五時間以内の立ち退き問題には驚きました。当時、営口の人口約二十万人、そのうち、日本人

が約二万人。日本人は一人残らず営口市外へ立ち退くべしと命令が出されて、大石橋よりの支線の営口には、列車一本しかなく、千人ぐらい汽車に乗り、後は大石橋までの約二十キロが炎天下の死の行軍でした。

営口市外へ立ち退くべしの命令の期限は午後五時まででしたが、それまでいることはできません。病気で寝たきりの人は隣組で安楽死の処理をして脱出しました。

又、会社では十二人の方々が召集され、男はほとんどおらず、女、子供百人を引率しての脱出は本当に大変なことでした。やつとのもので大石橋までたどりつき、駅にとまっている汽車に乗りこみ、どこに行くのか、わからぬままに、ただ乗りこんで腰をおろして一休みしていたら、駅長が来て、命令が出なければ動かすわけに行かない。待つてくれと言われ、自分たちで食事の準備をした。

夜中になって動き出し翌朝、奉天で汽車がとまり、全員下車の命令が出ました。

居留民団の世話で、奉天駅前の加茂町の醉山という

料亭に連れて行かれました。この料亭は今も瀋陽飛行機の加茂寮となっていて、二百人ぐらいの寝る用意はできると言うので、百二十八人を引受けてもらいました。

八月二十二日、会計の後藤さんに共同生活の話をして、持ち金を集めてもらい、三人を選任して一か月交替でむずかしい共同生活をするようお願いしました。一夜明けて電話が入り、事件を知りびっくりしました。それは八月二十二日、ソ連の兵隊の襲撃を受けて、五人の負傷者を出し、一人は出血多量で命をおとしました。

この悲しい出来事に直面して、全員に泣きつかれました。又これだけの人数の明日からの食事のことを考えると、頭の痛いことばかりです。

その内、ソ連兵が日本人の食品倉庫を破り、食品の取り上げが始まり、自動小銃をつきつけて、ヤボンスキー（日本人のこと）が抵抗するとみると殺されるありさまでした。

営口脱出からすでに十日たちました。八月の三十日、

奉天のアパートの窓から鉄西の満州ビール奉天工場の煙突が良く見えます。会社が取引のあるビールの棧函を納めていた実績のあった、工場長の市来さんをよく知っていましたので、午後、中国人の汚い服に着替えて、鉄西へ行きました。

満州ビールの工場の門にソ連兵が三人立っていた。

工場長が出て来て「鶴見さん、営口脱出のこと心配していましたが、お元気でしたか、今どこにおられますか、当方もソ連の命令で、ビールの製造を始めます。昨日の打ち合わせで、まだ、人の手配ができておりませんので、ビールの製造と棧函の修理等をやっていたきたいのです。

営口より三十人か三十五人ぐらい集めることになっています。九月一日から協力していただきたいのでよろしく願います。まことにすみませんが、金はありませんので、毎日出来高精算です」と言っつてビールを三杯ほどごちそうになりました。おいしかったビールの味が今でも舌に残っています。

市来工場長に感謝し、戦後の難民の苦しい一夏の思

い出を書いてみました。

## 私の八月十五日

兵庫県 吉村 格

終戦直前の五月十五日、新京神社の春祭の日に、召集を受ける。二十年前の徴兵検査で、第二乙種、兵役に関係なしと云われ、新京にある南満州鉄道株式会社本部で、参事課長として、対ソ作戦計画に参与していた私には、予想もしない召集である。とにかく三か月と言われて入隊したのが、延吉駐屯の満州第一五二六六部隊、石井忠三中尉の中隊である。

入隊時に支給されたのは、つぎはぎだらけの古い軍服、銃も剣ももちろんない。東満の山並をのぞむ山中に急造された掘建小屋に起居して、毎日の作業は山腹に穴を掘る手作業である。

八月十三日夜であったか、突然の全員集合。小隊分隊の編成替えと、それぞれの隊長任命。突然に、吉村、